

開催地名	愛媛県 内子町
開催日時	令和7年2月2日(日)10:00~11:30
開催場所	内子町共生館
語り部	松井 憲(広島県広島市安佐南区)
参加者	内子町民 70名
開催経緯	当町では、幸いにも、過去、大きな災害を経験していないが、南海トラフ地震では大きな被害が想定されている。大規模災害の実体験を交えた講和を通して、被災した際の心構えや、正常性バイアスの解消など、防災意識の向上を図りたい。
内容	■はじめに 1. 自己紹介 平成26年8月に発生した「広島市豪雨災害」を経験。被災者のこころの復興と防災啓発を目的に、「復興交流施設モンドラゴン」を設立し、地域の防災教育や交流活動に尽力している。さらに、災害の教訓を後世に伝えるため、「広島市豪雨災害伝承館」の開館に携わり、2023年に副館長に就任。防災活動を継続し、地域の防災意識向上に努めている。 ■広島市豪雨災害の体験談 ○災害発生時の状況 広島県阿武山付近の自宅で、21時半頃に雷鳴が鳴り続ける異常気象を経験。0時半には、「バケツの水が一気に落ちてきたような豪雨」が2時間半続き、それが引き金となり土砂崩れが発生した。 発生当時、雷や雨の音に疲れ果て眠っていたが、翌朝、奥様に起こされ、異変に気づく。 ○異変に気づいた朝 ・いつも聞こえる鳥の鳴き声、新聞配達バイク音、JR可部線の始発電車の音、車の往来音が完全に消えていた。 ・周囲には、山から流れてきた木の皮がはがれたり、枝や幹が折れたりした清々しい匂いが広がっていた。 ・自宅の周囲を確認すると、近くのマンションと駐車場に流れ着いた木々が天然の堰堤となり、自宅は土砂に巻き込まれずに済んでいた。 ・しかし、家の周囲はガードレールが埋まるほどの土砂で覆われ、身動きが取れない状況だった。 ○避難の決断 ・周囲を見ると、山の上の建物の屋根に避難する住民と、救助ヘリの姿が確認できた。 ・奥様が硬直し、恐怖で動けなくなっていたため、声をかけて避難の準備を始めた。 ・しかし、30分以上待っても救助ヘリは自宅付近に来ず、救助が進まない状態が続いた。 ○救助と脱出 ・9時頃、JR可部線方面からレスキュー隊が到着。 ・レスキュー隊も土砂で体力を消耗しながら移動しており、「可部線まで避難できれば安全」と言われ、待機を指示された。 ・9時半には、自衛隊のトラックが5台到着し、一安心するが、救助には来なかった。 ・11時半頃、息子から連絡が入り、可部線まで迎えに行くとのこと。 ・夫婦2人で避難を開始するが、土砂が80cm以上積もっており、数秒の距離を進むのに10分以上かかる状況だった。 ・奥様と協力しながら土砂をかき分け、13時半頃に息子と合流することができた。 ■災害後のトラウマと復興活動 ○トラウマ体験 ・被災10日後、行方不明者の捜索中、重機で地面を掘り返しながら、ブルドーザーで土砂をすくい、その中に遺体が見つかることもあった。 ・寝ている間も工事現場の音が続く、その音を聞くと、災害時の記憶がフラッシュバックするようになった。 ・また、土砂の臭いを避けるため、外に洗濯物を干すことができなくなった人もいた。

	○「復興交流施設モンドラゴン」の設立 ・行政が道路や建物の復旧を行う一方で、被災者の心のケアが行われなかった。 ・特に高齢者は、転居や死亡によりこれまでのコミュニティを失い、孤立する人が増えた。 ・そこで、防災教室や啓蒙活動、地域住民の交流の場として、「復興交流施設モンドラゴン」を設立した。 ○「広島市豪雨災害伝承館」の開設 ・被災者の心のケアへの対応の大事さと、災害の教訓を次世代に伝えるために、「広島市豪雨災害伝承館」を設立。 ・広島市に対し、復興支援プラン50項目を提案し、快諾を得た。 ・途中で西日本豪雨が発生し、ボランティア団体と被災地の意見が合わず、調整に苦労したこともあったが、2023年9月1日に開設。 ・一般社団法人を設立し、自ら運営を行うことになった。 ■防災リーダーに求められる意識改革 ○「防災意識を呼び起こすための研修」 ・多くの人は、「自分の感じる危険度と、実際の災害の危険度が一致していない」。 ・そのため、危機感が足りず、実際に身に危険が及ぶまで逃げない。 ・そういった人々に対し、「本当に危険な状況とは何か」を伝え、避難の重要性を意識付ける研修が必要。 ■まとめ ◆災害から命を守る3原則 1.想定に囚われるな！ 2.その場で最善を尽くせ！ 3.率先して避難者になれ！ (避難することで、周囲に「今すぐ逃げるべき状況」であることを伝える) ◆「ホームランを狙うな、ヒットをコツコツ打て」 ・防災意識は1度の啓発活動では定着しない。 ・何度も繰り返し伝え続けることで、人々の意識に刷り込むことが大事。 ・例えば、避難訓練の際に、キッチンカーを招致するなど、参加者が集まりやすい工夫も必要。 防災とは「日常の積み重ね」であり、地域全体で防災意識を高めていくことが、未来の命を守ることにつながる。  
開催地より	大規模な土砂災害を経験された語り部から、体験談や、被災者の心境、復旧に向けた地域の取り組みについてお話しいただいた。住民の方には防災を自分事としてとらえていただき、自助共助を推進していきたい。